



撮影：寺崎誠三

紫芳会だより ～輝く先輩達～

No. 47

2016. 7. 15. 発行

稲葉なおと氏 (高校30期)

作家・一級建築士

1978年立川高校卒業。83年東京工業大学建築学科卒業。一級建築士として商業施設、分譲マンションの企画・設計を数多く手がける。その後、短編旅行記集「まだ見ぬホテルへ」(日本経済新聞社)で紀行作家としてデビュー。長編旅行記「遠い宮殿」(新潮社)でJTB紀行文学大賞奨励賞受賞。資生堂ギャラリーで写真展開催後、小説、児童文学、写真集を次々と発表。「ドクターサンの住宅研究所」(偕成社)、「匠たちの名旅館」(集英社インターナショナル)、「0マイル」(小学館)他著書多数。最新刊は「モデルルームをじっくり見る人ほど『欠陥マンション』をつかみやすい」(小学館)。現在も長編小説「ここに翼を」を雑誌「ダンスビュー」に、宿泊記「秘蔵の宿」を毎日新聞webに連載中。公式サイト <http://www.naotoinaba.com>

私には今でも時々思い出す授業があります。当時の立川高校には、私たちよりも30年も40年も前に卒業された先輩が何人も、母校の教壇に立たれていました。その中のひとりの先生の、入学して最初の授業でした。冒頭で先生がいきなり切り出されたのです。

「こうして顔見りゃわかるよ、お前らは絶対出世しない」

私も含め全員がぼかんとしていると、先生は、なぜだかわかるか? と続けられました。

「高校受験に成功したくらいで周りの大人からちやほやされて、俺は人一倍優秀だって勘違いした、エリート面してるからだよ」

全員の顔から、呆気という表情が抜け落ち、ぴりぴりしたものが漂い始めました。

「いいか、世の中にはお前らなんかより、数倍凄い奴がいるし、ユニークな奴がいる。そんなことも知らないで、俺は人より優れてるなんて勘違いしてる奴は絶対に出世しないからな、よく覚えとけ」

ぼきり。教室のあちこちから、そんな固い音が聞こえたような気がしました。クラス全員の、少々高く伸び始めていた鼻が一度にへし折られた瞬間でした。

自分の土俵はどこにあるのか

ただ私に関して言えば、その授業に臨む以前に、入学当初に伸び始めていた鼻は既に何度も、それこそ根こそぎ折られていたのです。

同じクラスになった同級生の発言を耳にし、行動を目の当たりにするたびに、自分がとても幼く感じられて仕方ありませんでした。実は2、3歳年上なんじゃないか。そう思うてしまうような、大人びた雰囲気は漂わせた「凄い奴」がクラスには何人もいたからです。

彼らは授業中の発言で、私には辞書を引かないと意味のわからないような外来語を自然と口にしていました。その物腰も、このまま市議会議員に立候補できるのではとってしまうほど堂々としていました。まさしく高校受験に成功しただけで少々いい気になっていた私は、彼らと出会って自分の小ささを嫌というほど思い知らされていたところに、留めの一撃を先生から喰らったというわけです。

それからの私は、自分が生き抜くにはどうしたらよいか、真剣に考えるようになりました。ひねり出した対策をひと言で言えば、人に負けない「自分の土俵」がどこにあるのか、それを常に考えることでした。

大学の志望を「建築学科」に決めたのも、建築の設計に関心があったことが最大の理由ですが、加えて、数学にしても物理にしても英語にしても、太刀打ちできない同級生が何人もいる中で、人より多少得意だった絵を描く力との合わせ技なら勝てるという自分の個性を意識したからです。

「目的地は名建築の宿」の旅へ

建築学科に進んでみると、そこにもまた凄い奴が数人待ち構えていました。高校時代から建築雑誌を愛読し、20世紀を代表する建築家について語り出したら止まらない同級生に比べて、私は建築家の名前などほとんど知らずに入学していたのです。授業で設計の課題が出され、各自が設計案を提出するようになると、私は、自分の個性が光るようなユニークな案をいかにして設計し提案するか、そのことを第一に考えるようになりました。

卒業後の就職先を考える際にも、大手建設会社、大手設計事務所、そして有名建築家の

事務所に進む友人たちの中で、ポスト以外の従業員は私ひとりだけという、超零細事務所には進みました。大きな組織よりも、外に積極的に出られる小さなところのほうが、私の個性を活かせる気がしたからです。

その事務所で3年、仕事をするうちに、レストランやバー、ブティックなどを多店舗展開する気鋭の実業家と何人も出会いました。そして彼らが皆一様に「心地よい空間を企画したければ、とにかくホテルを見ないとね」と語っていたことが、事務所退社後の私の進むべき路の礎を築くことになったのです。

名建築の宿が目的地となる旅をつづける。

旅行記や長編小説を雑誌で連載し、児童文学を発表、週刊誌のグラビアに写真を載せ、写真集を出版できているのも、「建築設計」という「自分の土俵」の中で企画を練ったからこそ実現できた仕事です。もしも私が大学進学当初から作家を志し写真家を目指していたら、発表の場は永遠に頂けなかったでしょう。

名建築の宿の宿泊記を連載したい。

建築家ならではのこだわりで選んだ、ホテルの写真をグラビアで特集したい。

私からのそのような企画の申し出に、ユニークだと判断してくださった編集者、そして、至らない物書きに細々と指導してくださったベテラン名物編集者には大変感謝しています。

同時に、立高入学直後に、私自身が己の未熟さに気付き、私ならではの土俵探しへの道を拓いてくださった先生と同級生たちにも、心から感謝しています。

自分の個性とは何か。

自分の土俵はどこにあるのか。

私は今も自問し、探しつづけています。